

事例番号 013 「こみせ」によるまち再生(青森県黒石市・中町地区)

1. 背景

黒石市は青森市と弘前市の中ほどに位置する人口4万人弱のまちである。弘前藩から分知された黒石津軽家の城下町として発展し、農業(りんご、米)及び観光業(温泉)が今日に至るまでまちの主産業となっている。

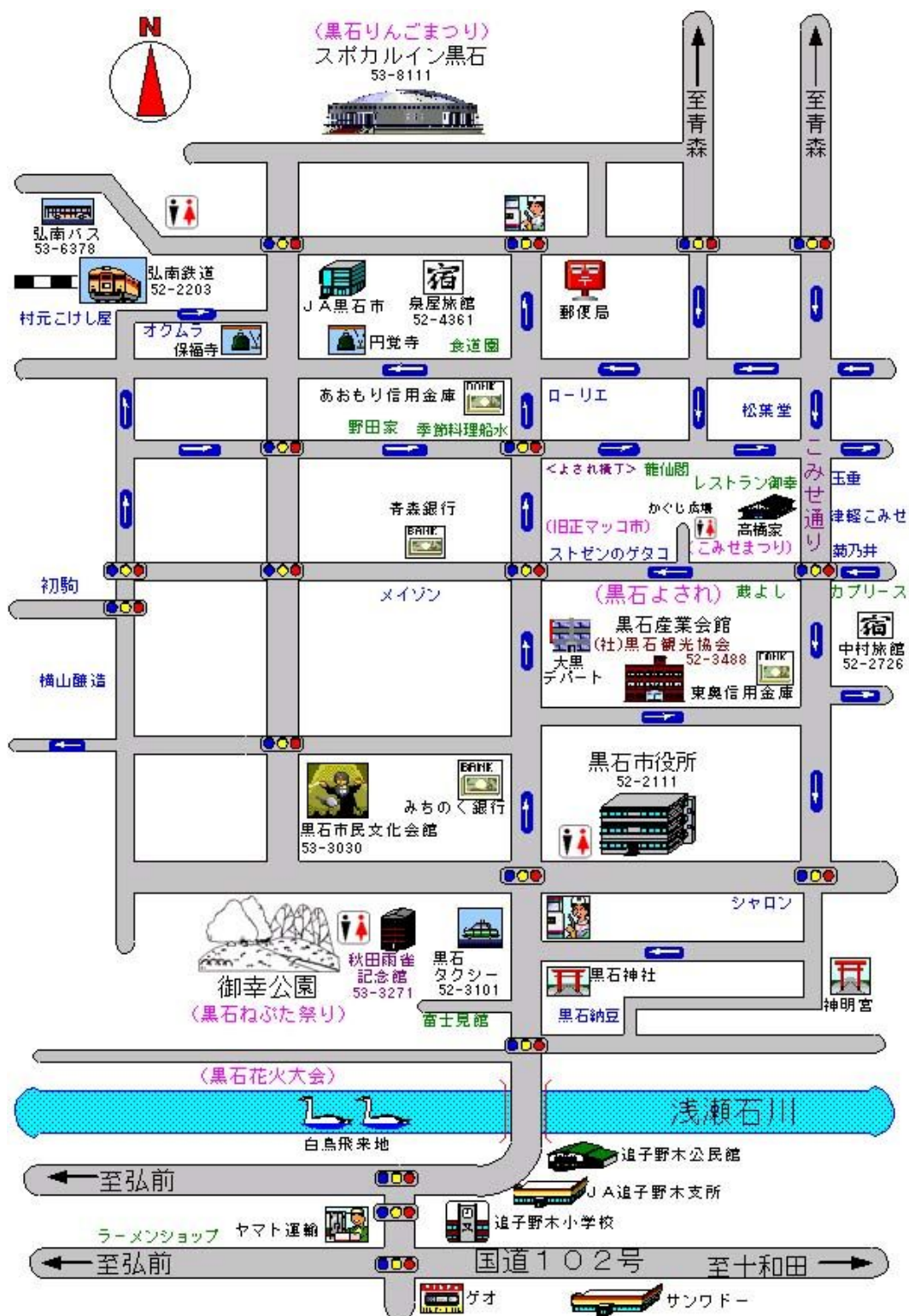
黒石市の人口は減少傾向にあり(2000年39,059人、2006年38,455)、中心市街地では空き地、空き店舗が増加するなど衰退が著しい。その中心市街地には藩政時代につくられた「こみせ」と呼ばれる木製のアーケードが数多く残されていたが、近代化の波や衰退の影響で徐々に減少し、今では中町地区とその周辺に一部が残されるのみとなった。

「こみせ」が失われるにつれ、人々はその歴史的、伝統的価値を再認識するようになってきた。その背景には、1983年の重要伝統的建造物群保存調査の実施、1986年の建設省(当時)「手作り郷土賞」の受賞、翌年の同省「日本の道」百選の指定という外からの評価もあった。「こみせ」がある通りは2005年に重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。

「こみせ」を後世に残そうとする地元有志が、マンション開発計画のあった旧家の土地・建物を1989年に買い取った。ここから「こみせ」保存をテコとするまち再生活動が始まり、2000年にはTMO「津軽こみせ株式会社」を設立した。2001年には「こみせ会館」を整備し、津軽三味線のライブ演奏会等を開催している。本稿ではこのような「こみせ」を中心としたまちづくりの概要を紹介する。



黒石市の位置 (資料:(社)黒石観光協会ホームページ)



黒石市中心部(右端がこみせ通り) (資料:(社)黒石観光協会)

2. 目標

中心市街地活性化基本計画(1999 年策定)は、「中心市街地は、黒石市の歴史・文化を育んできた場としてだけでなく、市の顔ともいべき場所ですので、再活性化をめざす」と述べ、活性化のコンセプトを、「こみせ」が輝き、「真の豊かさ」を実感できる街 —こみせを核としたまちづくり—とした。そして事業展開の方針を、「こみせ」の保全、再生により中心市街地の軸を形成とともに、活性化拠点を整備して区域全体に効果を波及させることとした。

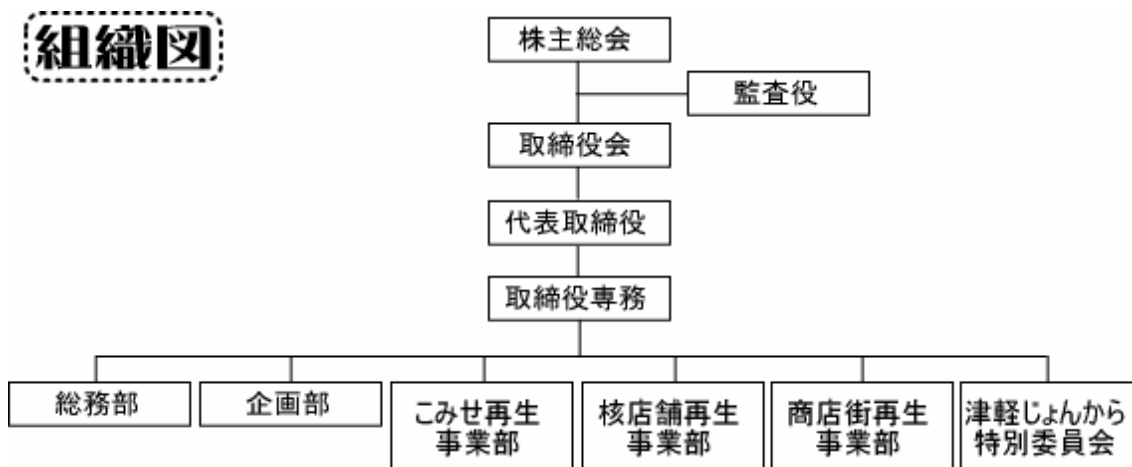
3. 取り組みの体制

地元の住民や商店主、黒石市が中心になって中心市街地の再生を図っているが、その活動の核となっているのが TMO「津軽こみせ株式会社」である。青森県、弘前大学、国も活動を支援している。津軽こみせ株式会社の資本金額は 9800 万円であり、出資主体と出資割合は以下のようになっている。

黒石市	49.0%
個人事業主	16.0%
中小企業・商業者	13.3%
大企業	10.0%
中小工業団体	9.4%
黒石商工会議所	1.8%
市民	0.5%

津軽こみせ株式会社には 8 人の役員がいるが、黒石市の代表はその中には入っていない。

TMO「津軽こみせ株式会社」組織図 (資料: 同社ホームページ)



4. 具体策

「こみせ」は北陸地方では雁木と呼ばれる木製のアーケードであるが、それは共同事業で一時に整備されたものではなく、一軒毎の建物が半公共空間として通り側に用意したものである。従って、ある時そのつながりの空間が一棟の意志によって断ち切られてしまう脆さをはらんでいるが、実際にそれが表面化し、それを契機に「こみせ」の保存活動が活発化していった。

(1) 「こみせ」保存・再生活動の経緯

「こみせ」が数多く残っている中町地区において、1989年に旧家が土地・建物を手放すことになり、そこでマンション開発が計画された。そのような動きに対し、「こみせ」を後世に残そうとする地元有志が資金を出し合い、マンション建設予定地の土地と建物とを買い取り、こみせの保存に乗り出した。これがこみせによる再生の契機となった。

その際の具体的な動きを紹介すると、20数名の仲間がマンション開発の話が伝えられてから僅か3日間で約7千万円の資金を集め、土地が売却される前日に買い取った。この電光石火の行動に関しては、津軽弁の「もっけ」という言葉で評価されることがある。「もっけ」とは、本業そっちのけで何かのにめり込む人を指す。この場合は、プラスの評価としてこの言葉が使われている。

この有志が中心となって1994年に有限会社「商舎」を設立し、買収した土地に「こみせ駅」を建てて物販を開始した。これは旧家の建物を利用して観光情報提供、交流、休息、土産物販売の場としたものである。1997年には「こみせ駅」のファサードを整備して修景もおこなった。

1999年には黒石市中心市街地活性化基本計画が策定され、また、翌年、黒石商工会議所TMO構想が策定された。そして2000年にTMO「津軽こみせ株式会社」が設立された。黒石市を始め商業者、事業者、市民が設立に参加し(出資者116名)、資本金は当初5,000万円であったが、その後増資されて現在は9,800万円になっている。



現在のこみせ (写真提供:黒石市)



こみせ駅(写真提供:黒石市)

(2) 津軽こみせ株式会社の活動

津軽こみせ株式会社は 2001 年 7 月に「こみせ駅」を 3,000 万円かけて改装し、「こみせ会館」としてリニューアルオープンした。この会館の 1 階の半分は土産物を販売する「津軽黒石こみせ駅」とし、その運営を有限会社「商舎」から引き継いだ。残りの半分は「そば処こみせ庵」とした。

同社は若手津軽三味線奏者を社員として雇用し、そば処こみせ庵やこみせ通りで津軽三味線の生演奏会「こみせライブ」を開始した。また、津軽三味線教室等によって伝統芸能の後継者を育成するプログラムも実施した(2005 年度以降は休止)。さらに 2003 年にはイベント広場「じょんから広場」と古い米蔵を再生した多目的ホール「こみせん」とを整備し、「こみせ会館」の伝統芸能育成活動の延長としてライブ演奏会等を実施している。

同社は TMO 活動として買い物代行・宅配サービスを実施した(2001 年度の単年度事業)。これは、FAX で注文を受け付け、参加 27 店舗が注品を集配所に持ち寄り、配送業者が宅配するというシステムであった。収益面では黒字とはならなかった。その他、津軽三味線 CD の制作・販売、「こみせまつり」への協力、黒石米を原料とした米焼酎「津軽こみせ」の開発・販売等を行っている。

今後の計画としては、「かぐじ」を活用したまちづくりがある。「かぐじ」(裏地)とは、間口が狭く奥行きが深い商家のバックヤードのことである。こみせのある一帯に数多く残されている。その一部は「かぐじ広場」としてすでに公共空間になっているので、それらに新たな「かぐじ」を加えてネットワークを形成し、歩行動線と広場空間とを生み出そうという計画である。



イベント広場として活用された「かぐじ」(写真:黒石市ホームページ)



「かぐじ広場」の位置 (資料:黒石市ホームページ)

5. 特徴的手法

歴史的建築物・空間である「こみせ」と「かぐじ」とを街並みの形成の重要な要素として活用している点、また、そのようなハードに津軽三味線という伝統文化のソフトを組み合わせている点が大きな特徴である。そのような活動の原点に情熱ある地元の有志が存在していたことも意義深い。

TMO 活動に関しては、事業の収益性に重点を置き、オリジナル商品の開発、青森県内各地の土産物の品揃え販売、共同イベントの開催など、様々な事業領域で活動を展開している点が特徴的である。

ちなみに、黒石市の宿泊施設の利用者数は増加してきている。

2002年	12.3万人
2003年	14.1万人
2004年	16.4万人

6. 課題

中心市街地に住む人々を増加させていくことが今後の課題である。中心市街地の空き地にデイケアセンターや温浴施設を整備する計画もあるが、これらを含め、住む人々の日常生活を支える諸サービスを充実させていくことが鍵になるであろう(買い物代行・宅配サービスもその試みの一つであったと位置付けられる)。

TMO 津軽こみせ株式会社は、伝統芸能の後継者育成プログラムは 2005 年度以降休止するなど、活動の転換期を迎えている。

(参考・引用文献)

黒石市ホームページ:黒石市中心市街地活性化基本計画

津軽こみせ株式会社ホームページ

リテール PLAZA 通信『機動性と柔軟性に富んだ民間主導の TMO』2002 年 8 月号 Vol36

北原啓司『津軽の「もっけ」たちのまち育て』Planners Vol35、2002 年

黒石市『市政要覧』同、2004 年